



ぴよんちゃん通信



福崎町社会福祉協議会
令和4年度 第2号

通信第2号では、3歳までの友だち関係をどう考えるか**一共感の楽しさとケンカー**について
はじめての子育て「育ちのきほん」(神田英雄・発達心理学)を参考にお伝えします。

友だちの発見 自我が生まれる1歳半ごろ、友だちを理解することも始まり、それまでとは友だちの見え方は格段にちがってきます。「友だちは自分と同じような存在だ」とわかる、そんな感じです。何よりも目に付くのは、友だちと同じことをしてみたいことです。それを、「友だちのいる世界」の扉を開くということもあります。自分と同じ存在である友だちは、自分のモニターのように感じられます。「友だちが楽しそうにやっていることは、自分にとってもきっと楽しい」と感じるので、友だちの遊びを自分のレパートリーに取り入れ、遊びが一層豊かになっていきます。苦手な食べ物も、友だちがおいしそうに食べていると、自分も食べてみようかという気持ちになります。ですから、母子が二人きりでいるときよりも、友だちがいるときのほうが、子どもとのかかわりはむしろ楽になります。

また、友だちのいる世界は、受け入れられる喜びと感謝する気持ちを経験させます。砂場で遊んでいる友だちがちょっとわきによって「ココ、イイヨ」と場所を開けてくれた。それだけで感謝します。友だちがおもちゃを貸してくれたとき、「貸シテクレタ!」とほほを紅潮させて感動を伝えに来てくれます。

ケンカが起こりやすい理由

こんなに楽しい友だちなのに、どうしてケンカが多いのでしょうか。ひとつの理由は、やはり自我の誕生にあります。「自分を尊重してほしい」と強く感じている年齢では、自分の領域が侵されることに関してとても敏感です。「カシテ!」と頼まれてもたいてい「イヤ!」と答えるのは、自分のものが他者に渡することは自分の領域が侵されたことと、感じるからです。

さっきまで使っていたけれど今は飽きて手放しているスコップを友だちが触った。その時、目を三角にして走り戻って奪いとり、「〇〇の!」と怒ることもあります。今は使っていないけれど、さっきまでは私が使っていたのだから、スコップは私の領域なのだ、それに手を触れたあなたは許せない、というわけです。

ケンカが起こりやすいもうひとつの理由は、友だちの使っているおもちゃにかぎってほしくなるということです。友だちは自分のモニターですから、「友だちの使っている物は自分にとってもきっと楽しい」と感じます。同じものが別のところにあってもダメ、だれも使っていないのだから楽しくないものだと、子どもは感じます。だから、友だちが使っているものにかぎって奪うので、トラブルやケンカが発生します。

この時期のケンカは、それ以前とは質的にもちがいます。1歳半までは、かみつきのひっかきはめったにありませんでした。あくまでもおもちゃがほしいので、それをひっぱりあうというのがトラブルの形でした。友だちを理解したころから、「自分にとって痛いことは友だちにとってもイタイ」とわかります。するといったんはおもちゃを手放してでも、噛みついて相手を泣かせれば奪うことが出来ることがわかります。こうして、引っかく、かみつく、髪の毛をひっぱるなどの身体に向けた攻撃が出はじめます。

ケンカにどう対処するか

友だちとのケンカは親や保育者の頭痛の種です。困るのは、この年齢でも力関係がわかり、する子とされる子が固定してしまうことです。しかも容赦がありませんし、子どもの動きがあ

まりにも素早いので、大人が止めようとしても間に合わないこともあります。

された子も痛いけれど、その子の親も切なくなります。しかしする方の子どもの親の苦悩も深いものです。何度言い聞かせても止まらない。「だれか、私の子どもをかんでください。そうすればこの子にも痛さがわかるから」と心の中でさけびたくなる時さえあります。

おもちゃの貸し借りでトラブルが起きるときは、「カシテ」の言い方を変えるだけで解決する場合があります。「カシテ」は、相手の子どもには「あなたの領域に侵入するぞ」という意味に聞こえます。「尊重してほしい」と思っている時代に「侵入するぞ」と言われるのですから、防衛体制に入るしかありません。「あなたを尊重しているよ」というニュアンスを伝える頼み方をすると、事情がまったく変わります。たとえば、「もう少ししたら貸してね」「終わったら貸してね」という頼み方です。「もう少ししたら」「終わったら」という言葉に、「あなたを尊重しているよ」というニュアンスが込められています。言葉を理解できる2歳児はたいていは「ウン」と言うでしょう。そして5秒ぐらいあとには「オワッタ」と言って、貸してくれるものです。

かみつきなどがあまりにもはげしい場合は、いったん、子どもたちを引き離しておくことも一つの方法です。心の世界を広げるためには、一緒にあそぶ必要は必ずしもない。時間を変えて同じ場所であそんでもかまいません。2才半～3歳半ごろになれば理解力が成長し、かみつきなどから卒業し始めるので、そのあとで友だちとのあそびを楽しんでも決して遅くはありません。

友だちとの世界を豊かに

扉が開かれた友だちとの世界を、おとなはどうサポートしていけばよいのでしょうか。

友だちとの楽しさを感じる基本は同じ動作による共感です。だから、子どもたちに同じ経験や知識があると、楽しい関係が豊かに発展します。たとえば、絵本を読んでもらった後、絵本の内容を再現してあそぶときなどです。同じようにころぶまねをして共感の世界が広がっていきます。共通の知識や体験が、友だちと共感できる幅を広げていきます。

友だちに認められたり受け入れられたりする経験を体験することも大切です。(スポーツ公園でかくれんぼをした時、目をつぶって鬼になってくれる友だちに「モウイイヨ～」と言葉をかけ、見つけられ「キャー」と、喜んだあの体験もそうですね。)友だちが喜んでくれた。「友だちに受け入れられた」と感動します。感動した子どもは、友だちに寛容になり、貸し借りもスムーズになります。共感の楽しさを保障することと、やりとりの気持ちよさを経験させること。このふたつが、1～3歳の友だち関係をサポートする大切な中味だと言えるでしょう。

まだまだトラブルは多いけれども、お互いを尊重しあうこともわかりはじめ、共感いっぱい楽しい世界が開かれる1歳後半から3歳の時期。子どもの心の中に「友だちとは伝えあうことができる」「友だちとゆずりあうこともできる」という人間観が産声をあげた時であるかもしれません。(発達心理学って素敵ですね。子どもの内面を想像し悩みが解決できるのですから)どの子も、誰をも大事にしたい。そして、何よりもママやパパ、おばあちゃん、おじいちゃんなど、保護者の方が元気でいられることが一番です。皆さん森のひろばでお待ちしております。

友だちとの世界の扉が開かれたその先は、言葉で考える力の始まりへと続き、入園となりますね。昨年度から遊びに遊んだ子どもたちは、公園でも体育館でも園庭でも活動を工夫をしないと満足できないかしこさが育っていると感じます。暑くなって水遊びが欠かせない季節を迎えましたが、おはなしごっこやかくれんぼなど集団遊びも取り入れて楽しんでいきたいです。ご協力よろしくお願いします。

トランポリンと森のひろば (体育館でミニトランポリン・ゲーム・手遊び・絵本を楽しんだ後、スポーツ公園とその周辺で遊びます。)

- * 活動日時と場所；毎週金曜日 10:00～ 第2体育館とスポーツ公園 予約なし
- * 準備；お茶、タオル、着替え・日焼け止め・虫よけ対策・上靴・昼食は各自で自由に

(2022年6月)